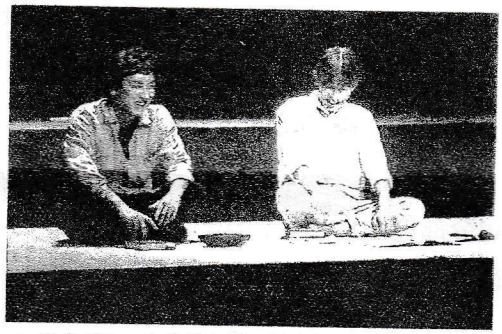
「ビキニの海からの証」上演を終えて

11月30日（土）、劇団the.創が舞台「ビキニの海からの証」を上演しました。構想から4年、劇団員も被災者の遺族から聞き取りを行ったり、ビキニデーin高知にも参加し元船員さんの話を聞いたりして準備を進めてきました。諸事情があり上演も2年程延期されましたが、この劇にかける思いは強く、劇団を応援してくれる多くの方、太平洋核被災センターや共演して下さった高知センター合唱団のみなさん、写真を提供してくれた岡村啓佐さんらに支えられこの日を迎えました。

今回のテーマは難しく初演の方も多く、みな仕事や家庭、活動を抱えながらの練習は思うようには進みませんでした。当日になっても不安の方が大きかったですが「高知のアマチュア劇団の自分たちにしかできない舞台がある」と幕が上がる直前に気合いを入れ、最初の航海の場面ではみなが声を張り上げ緊張も吹き飛び、みんなが本当の船員のように頼もしく見え、いい意味で開き直れた感触でした。

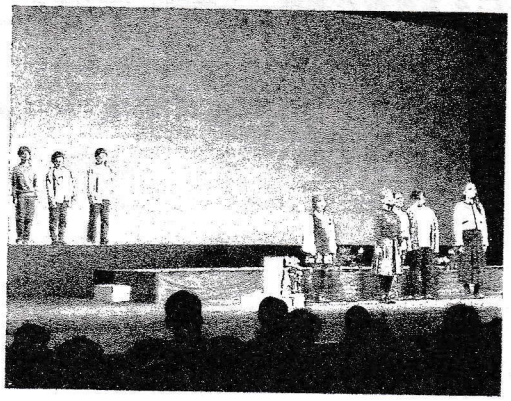


幡多ゼミの先生役を演じる宮川真幸さん（左）

前半は幡多高校生ゼミの活動が中心です。人前に出ることが苦手な子もおり、当日やっとマスクを外せた子もいますが、2か月間の劇の練習を通してそれぞれが成長してきました。当時の高校生の純粋な気持ちが船員さんや遺族の心を動かしたように子どものまっすぐな演技は見る人の心に響きます。最前列で観てくださったゼミOBや顧問の方も子どもの演技に当時の記憶が鮮明に蘇ったと聞きました。

始めは緊張していた他の演者たちも客席からの拍手や手拍子、時に起こる笑い、観客の息づかいに応答するように演じる側と観る側という垣根を越えて会場が一体感に包まれ、次々と覚醒していきました。この劇で自分は何を伝えたいのかそれぞれが問い続け、上手い演技でなくとも全力で臨んだからこそ観る人の心を打ったのかもしれません。

昼の部のカーテンコールでは、幡多ゼミOBと顧問の先生、室戸の船員さんと遺族の方、第五福竜丸展示館学芸員の市田真理さんに舞台から一言お話頂きました。それぞれの発言が深く結びつき演劇の内容が意味づけられました。第五海福丸の元船員小笠原さんはカーテンコールで日本被団協がノーベル平和賞を受賞したことに触れ、過去の問題ではなく今を生きる私たちの問題であることも示されました。世代を超えての共演で幡多ゼミの「黒潮に平和を」を歌い幕が下ります。見送る時に多くの方に声をかけて頂き、遺族の方から「感動した」「泣けた」「この劇をしてくれてありがとう」と言われました。その後楽屋での座談会も行いました。ゼミOBや顧問の方、市田真理さんからも劇中に何度も泣いたと言われました。子役たちは、今目覚め始めたこの事件への思いを語りました。



幡多ゼミの高校生役を演じた学生たち